



私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～

◎図書館からのインフォメーション	
企画展「歴史のなかの教科書：日本のものづくりをささえた理科」開催のお知らせ	2
教科書を寄贈してください!!	2
常設展示「家庭科教科書をさかのぼる～現在から戦前まで～」	3
ホームページを活用しよう！「ホームページ紹介part. 4」	4
◎特集記事 私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～	
・“ロー”からスタートしよう	竹内 洋 6
・遅筆堂文庫から学んだこと	遠藤 仁 7
・大学で学ぶということ	田端 輝彦 8
・学生の皆さんへ：特集「私は図書館をこう活用した」について	笠間 賢二 9
◎学生の読書室～私が選ぶこの一冊～（第7回）	10
◎新任教員からひとこと「私と図書館」	
図書館での出会い	田谷 久雄 12
図書室が怖かった	久保 順也 13
研究室貸出	永井 伸幸 14
◎図書館利用Q & A～図書館をもっと活用するために～	15
◎表紙の解説 クローンで増える植物—ユキノシタ—	佐藤 秀二 16

図書館からのインフォメーション

■ 企画展「歴史のながの教科書～日本のものづくりをささえた理科～」開催のお知らせ



毎年夏に開催している展示企画ですが、平成19年度は「歴史のながの教科書～日本のものづくりをささえた理科～」を開催します。

明治時代から現在までの理科の教科書の他、学校で使っていた理科教材などを展示します。

また企画展開催にともない、記念講演会を開催します。2部構成となっており、片方みの参加もできます。皆様のご来場をお待ちしております。

<展示企画>

- 期間 7月30日(月)～8月7日(火)
(土日も開館します)
- 時間 午前10時～午後4時30分
- 場所 宮城教育大学附属図書館 多目的閲覧室

<記念講演会> 8月4日(土)

- 第1部 午後1時～
理科学学生実験棟 理科共用実験室
「教科書の変遷と理科のものづくり」
講師：永田 英治 (宮城教育大学教授)
池山 剛 (宮城教育大学教授)
猿渡 英之 (宮城教育大学准教授)
- 第2部 午後2時40分～
情報処理センター 情報教育第2演習室
「湯川秀樹のめざしたもの」
講師：安江 正治 (宮城教育大学教授)

教科書を寄贈して下さい!!

自分が子どもの頃、使っていた教科書が家のすみっこに眠っていませんか？

宮城教育大学附属図書館では、教科書を大切に保管して、教育者の卵さんから一般の方々までの利用に供しています。ただ残念なことに、揃っていない時代のもがあります。

本図書館では、教科書の寄贈を皆さまにお願い致しております。

- ◎ 一番不足しているのは、昭和30年代の文部省検定済教科書です。
それ以前の明治まで遡る昔の教科書も不足しています。
- ◎ 保管するスペースに限りがあるため、ご寄贈いただいた教科書の取扱については、本図書館にご一任頂くことをお願い致します。

ご協力頂ける方は、ご郵送頂く前に下記にご連絡ください。お待ち申し上げております。

連絡先：宮城教育大学附属図書館 電話 022-214-3348 (午前9時から17時)

FAX 022-214-3351 (時間にかかわらず)

E-mail mokuroku.seiri@staff.miyakyo-u.ac.jp (時間にかかわらず)

図書館からのインフォメーション

■ 常設展示 「家庭科教科書をさかのぼる～現在から戦前まで～」

図書館の2階、階段をのぼったフロアで、家庭科教育講座の中屋先生のご協力をいただき、家庭科教科書のあゆみについて、常設展示をしています。

家庭科が小学校から高等学校までの普通教科となったのは新しく、1994年のことです。この時点、更には現在からさかのぼって、4期に分けて展示替えをしています。第1期は「現在の家庭科」でした。グラビア満載で、版も大きくなったきらびやかな家庭科教科書が紹介されました。第2期は「性によって異なる家庭科履修の時代」です。国際婦人年の取り組みや、国内での男女共修家庭科への道を開いたプロセスを実物の教科書を通して感じることができました。第3期は「家庭科ゆりかごの時代」です。対日占領をしたアメリカ合衆国・民間情報教育局（CIE）が、新しい家庭科で何を教えようとしたのか、女子教科として君臨してきた「裁縫」と「家事」を日本の関係者はどうやって残そうとしたのかを中屋先生の解説を通して教えて頂きます。第4期は「戦前の家事・裁縫科（家庭科）」です。図書館にある貴重本である「禁帯出」の資料に光が当たる予定です。戦後教育史を肌で感じることができます。是非ご覧ください。

過去の展示資料については、図書館ホームページで見ることができます。

写真やグラビア満載の家庭科教科書ですが、「今の大きさになったのはいつ?」、「私からわかる一冊どっから?」と疑問がわくはず、今、家庭科は小・中学校で毎週決まって教えられる教科ではありませんが、50年ほど前は高等学校初年入試の必修科目でした。展示館られていない家庭科教科書の多岐をひもといてみます。

展示会場	宮城教育大学附属図書館2階 第二展示場
第1期 内 容	現在の家庭科
展示期間	平成19年4月18日～5月13日
第2期 内 容	性によって異なる家庭科履修の時代
展示期間	平成19年5月16日～6月14日
第3期 内 容	家庭科ゆりかごの時代
展示期間	平成19年7月1日～7月28日
第4期 内 容	戦前の家事・裁縫科（家庭科）
展示期間	平成19年8月1日～9月7日

※ 展示資料閲覧タイム
家庭科教育講座の中屋先生がこの日時に同展示場へ、直接解説を解説を行います。いずれも毎朝10時～12時30分です。お気遣いにお立ち寄りください。

第1期	平成19年4月18日（水）
第2期	5月23日（水）
第3期	7月13日（水）
第4期	9月 5日（水）




図書館からのインフォメーション

■ ホームページを活用しよう！ ホームページ紹介(part.4)

・電子ジャーナルを使ってみよう！

1. 電子ジャーナルは、雑誌などの目次 (index) や抄録 (abstract)、さらに本文までを、パソコンの画面で読むことのできるものです。

2. 図書館ホームページから、ページの右、情報検索「◆電子ジャーナル」からアクセスできます。

3. 次のようなページが開きますので、ページ上部のロゴを  宮城教育大学 クリックするか、[電子ジャーナル・タイトルリスト](#) をクリックして下さい。

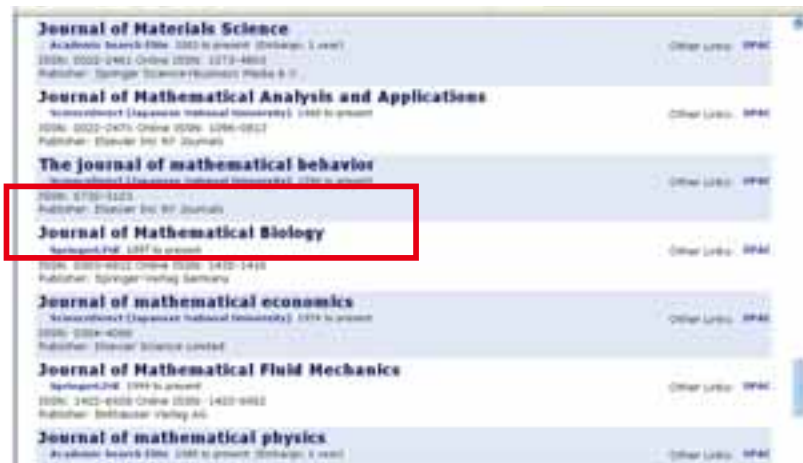
電子ジャーナルタイトルリストは、宮城教育大学から利用できる欧文電子ジャーナルの雑誌タイトル一覧です。読みたい雑誌名がわかっているとき、または、希望の雑誌が電子ジャーナルリストに含まれているかを探す時に便利です。

4. 試しに **The journal of mathematical behavior** を探してみましよう。

AtoZから、上部の誌名索引で「J」をクリック、次に「JO」をクリックします。

5. 現れた一覧を、ページを追って探していくと、数ページ後に、目的の雑誌名が見つかりました。

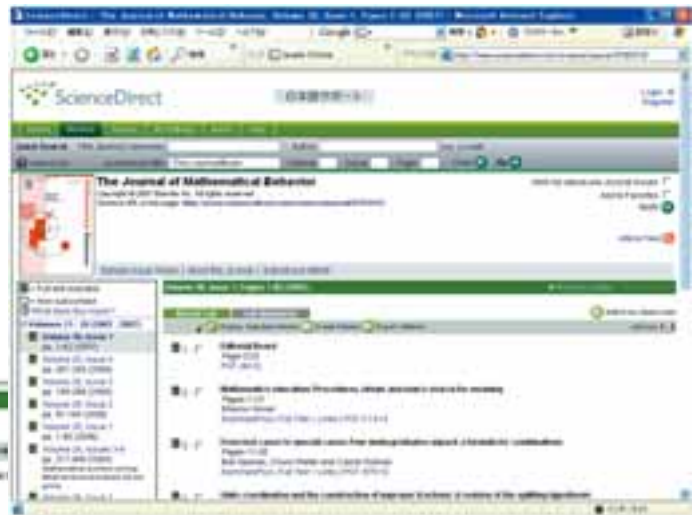
6. 雑誌名の下の子青字部分が収録データベースです。この部分をクリックすると、次のようなページが開きます。



図書館からのインフォメーション

7. あとは、巻号、ページなどから希望の論文を探します。

8. 巻や論文の左脇の ■ のアイコンの時は全文を見ることができ、□のアイコンの時はindexやabstractのみ見ることができます。



9. 読みたい論文タイトルの下部にある「[Full Text + Links | PDF \(114K\)](#)」などをクリックすると本文ページが開きます。下図は、PDFを開いた例です。この文書を印刷したり、自分のパソコンに保存したりすることもできます。

<注意>

一度にたくさんの論文をダウンロードしたり、ダウンロードしたデータを他人に送ったりすることは、著作権法上認められておりません。また、このようなことをすると、宮教大からの利用ができなくなりますので、くれぐれもご注意ください。



* そのほか、利用する上でご不明な点や電子ジャーナルについての詳しいことは、カウンター (022-214-3350) にお尋ねください。

特集記事：私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～

“ロー”からスタートしよう

竹内 洋

図書館との関わりということだが、私の場合、大学に入ってまず有名な本を読んでみようということで最初に実存哲学者サルトルの『存在と無』に挑戦してみた。しかし、何しろ難しくてひと月かかっても50ページと進まないうえ、内容も全く理解できない。それでしょげていたのだが、そんな私に大教室の教壇から先生がさらに追い打ちを掛けるように次のように言ったのである。

「君たち、大学生なら一か月に
1万ページ読まなきゃダメだよ。」

一か月に1万ページ。一日に333と3分の1ページだ。これには同輩たちも驚いたようだったが、何しろ先生を尊敬していたから、同輩たちとその日から取り組んだ。ただ、それは「読む」というよりもただひたすらページを「稼ぐ」というようなものだったが…。

しかも、サルトルのようなもので一日300ページも稼ぐのは難しい（それだと『存在と無』など一週間で「上がり」ということになってしまう）。だから、読むものも、分厚い理論書ではなく岩波新書のようなものへ、そしてエッセイや小説のようなものへとすぐに進化（退化というべきかも知れないが）していった。いや、正直言うと、それでも一日300ページは苦しい。だから、実際には、それは雑誌になり、週刊誌になり、やがて漫画も漫画本ということで仲間入りとなったのである。

そうやって『ガラスの仮面』も『スワンの恋』も貸本屋で借りて読んだし、週刊誌などもバカにしたものではないが、そういうもののいいところは短い時間に何百ページも読めることだ。お陰で同級生同士モノ知りになり、あれを読んだこれも読んだと話題に事欠かな

い日々が続いた。またページのストックもできるから（一日に666ページ読めば、翌日は「フリー」というわけだ）、今度は進化（退化）のコースを逆戻りすることにもなっていた。私はそうやって図書館に舞い戻った。そして、今度はいきなりサルトルなどと大上段に構えないで、簡単で面白そうなものから手をつけていった。

今なら、例えば、金の星社のシリーズ『日本の文学』などは小学校高学年向けだが内容高度な「解説」がついていて素晴らしいものだ。そして、そういうものが、実は、より進んだ読書への優れたガイドにもなっているのである。図書館に行き、開架の書棚を眺めてみよう。専門的なものの中に入門的なものがちゃんと混ざっていることに気づくはずだ。

「入門的なものから→専門的なものへ。」この考え方で書架の間を散策してみよう。私は1950～80年代に日本の知的な人々によって書かれたものを勧める。この年代の書き手には非常に優れた人が多いのである。私が手に取ったものの中には例えば今西錦司他の『人類の誕生』（河出文庫版『世界の歴史』に入っている）がある。それは「私たちはどこから来てどこに行くのか」という問いに答えようとするひとつの真摯な営みの書であった。それを読んだとき、私は何か学問の扉を開けたような気がしたのである。

この感覚は初めてクルマを動かしたときの感覚や、初めてスキーのボーゲンができたときの感覚に似ているかも知れない。「おおっ、動いた！」「おおっ、曲がった！」というあの新しい世界が開けたような感覚だ。こうして、ローからセカンドにシフトしていく。2年の夏休みごろがサード、3年に上がる頃にはトップ・ギアというわけだ。

（社会科教育講座）

特集記事：私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～

遅筆堂文庫から学んだこと

遠藤 仁

山形県東置賜郡川西町に、井上ひさし氏が町に寄贈した書籍や生原稿を蔵する「遅筆堂文庫」がある。開館当初は7万冊ほどだったと記憶しているが、今でも毎月書籍が送られてきて、蔵書数は13万冊にも及ぶのだという。個人の蔵書とはとても思えない規模であった。

開館当時、私は、隣接する米沢市の短大に勤務していたこともあって、覗いてみたことがある。井上ひさし氏の自筆原稿が、万年筆の太字で、しかもやや丸文字がかかった個性的な字で綴られていたことを今でも鮮明に記憶している。蔵書はあらゆる分野にわたっており、いずれの書にも付箋や書き込みが多数見られた。すべての書籍に目を通していたという事実のみならず、作家が原稿を一本書くのに、どれだけ労力と時間をかけているのかを実感しないわけにはいかなかった。私の専門に近いところ言えば、東北の一寒村が政府に愛想を尽かし、「吉里吉里国」として独立を宣言、これに反発する政府との攻防を描いた『吉里吉里人』は、いわゆる「ズーズー弁」の会話文をルビによって効果的に表記するなど、目新しい工夫がなされていた。また、明治初期に全国統一話しことばの制定を命じられた文部省の下級吏員、南郷清之輔の苦闘をコミカルに描いた『国語元年』にも、当時の状況をよく調べたものだと思分感心させられた。この作品は、後にドラマ化され、NHKで放映された。これらの作品は、楽しみながら改めて日本語を振り返ってみる契機ともなるだろう。

井上氏の文体は、軽妙ながら言語感覚は鋭く、日本語に関するエッセイも多い。遅筆堂文庫には、日本語・方言関係の専門書も多数収められており、氏の日本語に対する造詣の深さを窺い知ることができる。蔵書のなかには、その道の専門家でなければ理解が難しいものも含まれていた。井上氏の蔵書を概観するに、本を選んで買うというよりは、網を打

ってかかったものをすべて片端から読破したとでも言うべき勢いが感じられた。徹底的に調べ、よく考え、ひとつの原稿をものにするためには、相応の（財力と）エネルギーを要するのだということが、今でも頭に焼き付いている。

書庫のひんやりした空気のなか、ずらりと並んだ書籍の背表紙を眺めていると、時に時間が止まったような錯覚にとらわれることがある。研究書のなかには、その研究者が生涯をかけて取り組んだ著作も少なからずある。学生時代に、先生が「本を探すのも勉強のうち」としきりに仰っていたことを思い出す。今はインターネットが普及し、労せずして情報を収集することも可能だが、その情報が、ほんとうに信頼するに足るものなのか疑ってみたことはあるだろうか。昔から「タダほど高いものはない」とか、「タダほど怖いものはない」などと言われてきたが、昨今は、さしずめ「ただほど嬉しいものはない」とでも言ったところだろう。間もなくさまざまな科目でレポート課題が出され、担当の先生から安易にWeb検索によるデータを使用しないようにご注意があるはずである。誰が、何にもとづいて作成したか分からないデータなど、全く学術的な価値をもたないからである。大学で自由に学べる時間というものは、今となっては実に貴重な時間だったと思うし、この上ない贅沢だとも思う。皆さんには、まとまった時間のある時に、ぜひ図書館に足を運び、漫然と背表紙を眺めてみることをお勧めしたい。気になった書籍は、目次を開き、後書きなども読んでみれば、先人たちの営みに接してやることのできるだろう。本学の蔵書の特色のひとつでもある児童書や絵本を開き、自分の“子ども”時代に思いを馳せるのもいいだろう。書籍の扉を開けば、そこには固有の世界が広がっており、新たな出逢いがあるかもしれない。

(初等教育教員養成課程子ども文化コース)

特集記事：私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～

大学で学ぶということ

田 端 輝 彦

大学では数学を専攻していた。筆者の受けた講義とは、まさに教授の独演会であり、講義中はひたすら黒板を写し、家に帰ってもう一度その論理を追うことが勉強であった。テキストは指定されていたとしてもその通りに進まないことが多く、予習しようにも数学の専門書を1人で読むことができなかったこともあって、したことはなかったと思う。

勉強の仕方が一変したのは、卒業研究のゼミナールに参加するようになってからである。英語で書かれた数学の専門書を1人で読むことは、当初は大変な作業であった。レポーターの役割は、どこまでわかったか、どこからわからないのかを明確にすることであると教えられていたが、どこがわからないかがわからない。証明の道筋は追えたとしても、なんか気持ち悪いという状況でゼミに臨むことが多かった。卒研メンバーの共通の目標が数学の専門書を1人で読めるようになることであったので、後期にはゼミを週に2回にしていたが、ともかく数学漬けの日々を送った。卒業間際には、数学的に考えながら厳密に論理を追う、数学の専門書の読み方がある程度は理解できたように記憶している。

大学院では数学教育の専攻となり、講義は全てゼミナール、それが週5回となった。日本の歴史や思想史は日本語であるが、数学や数学教育の学問的体系の内容はほとんどが英語であった。日本語と英語の文献講読を比較して思うことは、わかるかわからないかは言語の問題ではなく、その意味する概念がわからないからわからないことが多い。仕方がないので、教育学辞典や哲学辞典で調べる。あるいはより基本的な文献を探して読む。学習指導要領やその解説、数学教育についての大家の文献は知っていることが前提で進められているが、悲しいかなその教養が自分にはない。レポーターの当番の日は当然として、毎日寝る間も惜しんで予習してゼミに臨んだ。

するとどうだろう、雲の上の人であった先

輩や同級生の発言内容が少しではあるがわかるようになってきた。あるいは、その議論に参加できるようになってきた。こうなると少し面白くなってきた。自分の知識量が増え、基本的文献を読む方法がわかってくると、指導教官のコメントがある程度予想できるようにもなってくる。毎回の予習は、自分の読解力が試されているような錯覚に陥るようになってきた。こんな生活を2年間続けているうちに、少しずつ、数学教育の勉強の仕方がわかってきたように思う。

勉強の仕方はそれぞれの専門で異なる。少なくとも数学科にいた頃は、講義のわからないところを解消する目的で図書館を利用してしたが、どちらかと言えば、講義ノートの論理を追うことに多くの時間をかけていた。卒業研究でも一冊のテキストをどれだけ深く読めるかが課題であり、類似の文献を読むことはあまりなかったと思う。数学教育専攻になってからは、図書館なしの生活は考えられなかった。基本的な文献や古典的名著、あるいは類似の専門書がすぐに手に取ることができるばかりでなく、各種の用語辞典や百科事典がそろった図書館は知的宝庫であったからである。

一方で数学と数学教育の勉強で共通することは、わからないことがあったとき、良書と言われる古典をじっくり読むとよいということである。さらには、行間を読むといった表現の読解力が重要なことも、両者の勉強の仕方には共通しているように思う。

このような話を長々と書いたのは、私の講義で宮教大生に求めている勉強とは、まさにこのようなものだからである。書物と格闘しながら勉強してみると、大学の講義は10倍は面白い。テキストを中心としつつも、類似の書物や辞書、あるいは名著と呼ばれる古典を図書館で探し出し、いにしへの賢人と対話するつもり勉強をぜひ、お試しあれ。

(数学教育講座)

特集記事：私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～

学生の皆さんへ：特集「私は図書館をこう活用した」について

笠 間 賢 二

今回の特集は、「私は図書館をこう活用した～大学での“勉強法”～」というテーマで、本学の3人の先生方に寄稿していただきました。

このテーマを設定したのにはいくつか理由があります。そのひとつは、大学教育の充実のために図書館が果たすべき役割がきわめて大きくなってきているという、昨今の動向です。現在、大学（高等教育）改革が強力に押し進められていることは皆さんご存知のとおりですが、その課題のひとつとして「単位制度の実質化」ということが強調されています。それはおおよそつぎのようなことをさしているわれています。

現在のわが国の大学制度は、単位制度を基本としており、1単位は、教室等での授業時間と準備学習や復習の時間をあわせて標準45時間の学修を要する教育内容をもって構成されている。しかし、実際には、様々な原因により、授業時間以外の学習時間が大学によって様々であるとの指摘や1回あたりの授業内容の密度が大学の授業としては薄いものがあるのではないかと懸念がある。このような実態を改善するための種々の取組を総括して単位制度の実質化のための取組と言う（文部科学省・中央教育審議会大学分科会資料、2004年12月15日）。

本学でも、平成19年度の『履修のしおり』で、単位制を「授業時間」と「学習時間」とに分けて平明に説明し、とりわけ「学習時間」（「授業外の学習」）を促す記述を設けるようになりました（5頁）。つまり、趣旨はこういうことです。15回の授業を欠かさず受講しても、それで2単位を満たす学修をしたということではなく、授業の前後に予習や復習の「授業外の学習」を行わなければ、2単位とは認めないということです。より具体的に言えば、講義形式の90分の授業では、その2倍の時間を「授業外の学習」に充てなければならないということになります。もちろん、この法令（大学設置基準）の定めを厳密に適

用しようとするれば、それに伴うさまざまな条件を大学側が整えなければならないのですが、基本的原則はこういうことなのです。だとすると、そのためにもっとも整えられた環境を提供できるのが図書館だということになります。単位制度の実質化→大学教育の充実のために図書館を活用すべきであるというのは、こういうことをさしています。

とはいっても、図書館をどう活用すればいいのか、戸惑う人もいるはずですが、学校には小学校のときから図書館がありながら、それを有効に活用する教育方法を採用してこなかったという、日本の近代学校教育の「ツケ」もあるはずですが、そこで、大学教育の充実のために図書館サイドからできることとして、先生方に図書館活用の体験談を語ってもらい、それに示範効果を期待しようというのが、今回の特集のねらいです。いまは、目の前に聳え立っているかのようにみえる先生方も、現在の水準に辿りつくまでにはかなりの苦勞と努力の積み重ねがあったはずであり、そのことを自分史風に語っていただくということです。もちろん、図書館とのかかわりだけでなく、先生方の研究の仕方や、授業での工夫を語っていただくことも大歓迎ということで、執筆をお願いしました。

いうまでもなく、図書館は文化資源の宝庫であり、そこを起点にすれば、皆さんをもっと広くもっと深い世界へと誘ってくれる入り口にもなるはずですが、図書館では、そうした機会と情報を提供すべく、あなた方を待っています。それを利用しない手はありません。これを機会に、「授業外の学習」に励み、もっと図書館に足を運んでくれることを強く期待します。

（附属図書館運営委員会委員：学校教育講座）

第7回 学生の読書室 ～私が選ぶこの一冊～



『ハイドラ』

(金原ひとみ 著、新潮社、2007年)

国際文化専攻4年：佐藤千鶴

「淫」と「純」、二つの欲望を抱えた主人公を描く金原ひとみの世界。そこには、確かな自分の世界を持つ冷徹な男と、子犬のように純粋でまっすぐな男が存在する。女は前者にのめり込み、後者を恐れる。

まっすぐな瞳、うそのないことば、無条件に愛されること、そうした矛盾のないものが怖い。自分のせいで簡単に傷つけ、壊してしまうことができるから。愛し愛されるだけでは拭い去る

ことのできない、身にこびりついた不安を抱え、矛盾に慣れ切った自分がある。側にいたい、その腕の中にいたいのに、支えを失ってまっさらな矛盾のない世界へと飛び込む勇気がない。醜い自分を見せられない相手より、無関心に目を背けていてくれる相手。骨の浮き出た早希のからだは、穢れのない愛を受け入れることができない。食べ物を受け付けないのと同じように。愛も食べ物も、口に入れては噛み砕き、吐き出していく。自分の意思とは無関係に、きれいなものを汚物へと変える行為に没頭する早希の姿は、矛盾した現代の若者そのものに思えるのである。

『くらやみの速さはどれくらい』

(エリザベス・ムーン 著、小尾美佐 訳、早川書房、2004年)

障害児教育専修2年：奥まり子

くらやみの速さはどれくらい。

こう聞かれたら、あなたはどうか答えますか？このタイトルは、著者が、自閉症である息子から実際に質問された内容からつけられています。彼は、「光よりも暗闇のほうが速いはずだよ。だって最初に暗闇があるんだから。」と言ったそうです。

学部の時から障害児教育を学んでいる私は、様々な障害のあるたくさんの子と出会い、関わってきました。自閉症といわれる子もいます。良い意味で、彼らには独特の世界観があるように思います。もしもその世界を覗くことができたら…そう思わない時はありませんでした。そんな時に出会ったのがこの本です。作品自体はフィクションですが、ひとつひとつのエピソードが非常に多くのことを物語ってくれます。まだ多くの誤解を受ける障害ではあるものの、この1冊の本をきっかけに、自閉症といわれる人たちの持つ世界観の一部分を知ってもらえたら嬉しく思います。

『子どもを喰う世界』

(ピーター・リーライト 著、晶文社、1995年)

学校教育専攻4年：鈴木直美

『子どもを喰う世界』のなかには、日本では考えられないような、世界の子どもたちの児童労働の様子が書かれています。子どもたちの一日の労働時間の長さや、どう考えても低すぎる労働賃金。「ひどい」という言葉では表わしきれない悲惨な労働環境です。子どもたちが心身共に傷つけられている状況が、目の前につきつけられてくるようで、心が痛みます。

このような子どもたちの状況を知って「かわいそう」と思う人がいるかもしれませんが。あるいは、「どうしようもない」、「しかたがない」と思う人もいるでしょう。どちらも多くの人が感じる気持ちでしょうが、これらの言葉で片づけてしまうのではなく、知ることを出発点にしなければと思います。みなさんもまずこの本を読んで、知ることから始めてみませんか？

『新訳 星の王子さま (Le Petit Prince)』

(アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ 作、倉橋由美子 訳、宝島社、2005年)

数学教育専修1年：庄 司 貞 夫

子どもの感覚は鋭く豊かである。なぜか、本を読み進めると、子どもは純粋で固定的な観念がないからであろうと思われる。大人になるにつれて、なにも考えず素直にものをみることは、確かにできにくくなる。その例として6人の大人たちが登場してくる。その大人たちは、思い込んだら最後といわんばかりに執拗な固定観念に縛られていて、それぞれのものが大事なこと

であると思っている。しかし、純粋な子どもからみれば、その中に子どもの心を捉えるものは何一つない。ここには次のような一文がある。「心で見ないと物事はよく見えない。肝心なことは目に見えないということだ」これは目の前にある現実をそのまま受け止めるのではなく、心でみて、本当に大切なものが何かを考えよと示唆していると感じた。

大人になっても、子どもの感覚を的確に、素早く理解することが出来る人はどれくらいいるだろう。子どもたちに“大切なこと”を伝えなければならぬ大人が、子どもより曇った目をしてはいけなさと心から思われる一冊である。

『いのちの教科書』

(金森俊朗 著、角川書店、2003年)

学校教育専攻4年：村 松 芳 恵

本著は、石川県で小学校教師をしている金森先生が書いたものである。私がこの本と出会ったきっかけは、大学の授業である。金森先生の実践をおさめたNHKのテレビ番組とともにこの本の存在を知った。

先生の行う「命の授業」は、様々な角度から「命」に触れている。それを子どもたちが受け止め、考える。「命」を粗末にする子どもたちが増えている昨今では、このような教えはとても大切なものであろう。今後教育に携わっていくとする人も、そうでない人も、「命」について考え、また教えていかなければならない。その手がかりのひとつとして、この本に書いてある実践を読んでみるのもよいのではないだろうか。金森先生の、「命」に対する真剣さ、そして子どもたちへの愛情が伝わってくる実践がたくさん書かれている。そう簡単にできるものではないが、心に残るものがあると思う。

『そのときは彼によろしく』

(市川拓司 著、小学館、2004年)

数学教育専攻4年：田 齋 佑 紀

この話は、幼なじみの3人が再会するのですが、思わぬ形となってしまふ、そんな3人の心理を巧みに描いた話です。映画になったのでご存知の方も多いかと思います。

人は別れを惜しみ、再会を喜びます。ただし、再会の仕方によっては必ずしも喜ばしいものとは限りません。自分にとってうれしい再会でも、相手にとってはそうでないことも。

この話の主人公は、別れを告げるヒロインに「ずっと待ち続ける」と決意を伝えます。それが彼女にとって喜ばしいことではないのです。

自分の気持ちと相手の気持ち、両方を考えると、パンクしそうになります。でも、片方しか考えなかったら、なんと乗り心地は悪いものとなってしまいます。

空気とか感情は目に見えない。見えないのにどうして僕らはこんなにも気にするのか。それは心に訴えかけてくるからなのでしょうね。

この本を読んで一度確認してみたいかがですか、みなさんの心の空気圧。

ここは学生の皆さんが最近読んだ本、印象が強かった本、お勧めの本などについて自由に選んでいただき紹介してもらうコーナーです。図書のみとし、雑誌は除外しています。

たくさんのお原稿が集まりました。ありがとうございました。

いただいた原稿を編集委員会で選定し掲載させて頂きました。

今後もこの企画を継続していきますので、皆さんからの投稿をお待ちしています。

ここに紹介する本は図書館入り口の書架に「学生の読書室」として配架しています。

【原稿大募集】

次号発行は3月の予定です。

名前、所属、学年、連絡先と、紹介する本の書名、著者名、出版社を記入の上、400字以内で、図書館カウンターにフロッピーディスクで、または下記アドレスへお送り下さい。

尚、「こもれび」の記事は図書館のホームページでも公開されます。

mokuroku.seiri@staff.miyakyo-u.ac.jp

図書館に所蔵していない図書については、学生希望図書として図書館に購入希望を出していただくことも出来ます。

新任教員からひとこと：『私と図書館』

図書館での出会い

数学教育講座

田谷久雄

小学生時分には本よりキャッチボールが好きだった私であるが、なぜか時々区立図書館には出かけていた。学校の図書館へ行くのはガリ勉君のすることで格好悪いと思っていたこともあるが、読んでいた本はたいてい推理小説だったということもあるかも知れない。それでも思索に耽るということに出会った。これは瞑想するほどの知的準備がない段階で、物語をたよりに自分の世界に浸るという新鮮な体験だった。

中学生になると生活習慣も変わり、随分と勉強に時間を割くようになった。しかし、それに伴って図書館にはあまり足を運ばなくなったと思う。学校の図書館に行くのはガリ勉君と思っていたが、いざ自分で勉強を始めると学習の場所は図書館である必要はなかったわけだ。ある種の受験勉強というものは題材を探して勉強するのではなく、すでに準備されたものを学習するのだから、気が散らない環境さえあればどこでも良かったのだ。むしろわかった時に「ヨッシャ」と呟いたり、時に逆立ちをして頭に血を上らせたりと、多少の奇行ができる場所の方が心地よかった。

高校では大学の系属校に進んだためか、受験勉強に縛られない生活ができた。図書館には教材のない学習課題に取り組むために出かけたほか、少し賢そうな大人がいるところでその雰囲気味わいたいという想いで大きな公立図書館にも足を運んだ。定期券も持っていたので電車に乗って都立図書館にも出かけた。図書館での調べ物はなぜか文学や歴史ものが多かったが、数学を勉強に来ていた女の子に数学を教えるという幸運にも出会った。これも一つの図書館での出会いである。

大学生になると図書館との付き合いは一変する。これまでの公立図書館にはない専門書が揃っている大学の図書館が唯一調べ物の

きる場所となった。絶版になった書籍もここなら手にすることができる。偉大な数学者の論文も手の届くところに置いてある。

私の専門は数学である。時として数学は紙と鉛筆さえあればできるという人がいる。今の時代ならこれに計算機も加えるのかも知れない。しかし、数学研究の実態はそうではない。長い歴史を持つ数学の中で自分のアイデアだけで新しい成果を出そうということは、幼子が自分一人で考えて算数の教科書を作るようなものである。数学の研究で大切なことは前人の素晴らしいアイデアを如何に吸収するかである。そのためにはアイデアの宝庫である数学の専門誌は欠かせない。数学に限らず、本を読むことで自分の知らない世界を学ぶことができるわけだが、こと数学に関しては、前人の研究の足跡を辿り、そのアイデアと出会い、自分のものにするのが特に重要である。如何に突発的な優れたアイデアも、それが理路整然と説明できなければ数学としての価値は認められないし、今ある定理は古くから続く証明の続きとして得られた一つの経過的結果に過ぎないのだから。

最近では電子化の影響で図書館との付き合い方も変わってきたが、雑誌代の値上げや大学予算削減の影響で貴重な雑誌の購入が儘らなくなっている。図書との出会いは、いろいろな人達の知識との出会いである。目先の損得で知的資源が減ってしまう現状は、大学を大学でなくしてしまう危険性をもつ。院生時代に読んだコーツさんとワイルズさんの共著論文は、短いながらその巧みな手法に感動的な出会いを感じたものである（このワイルズさんが後にフェルマーの大定理を解決する）。どうか今後も新たな出会いが見つかる図書館であって欲しいと切に願う。

新任教員からひとこと：『私と図書館』

図書室が怖かった

学校教育講座

久保 順 也

小学生の私にとって、図書室はちょっと怖い場所だった。

私の通った小学校は古い木造校舎で、図書室は2階西側にあったのだが、午後になると陽が入らず薄暗くなる。図書室独特の古い紙のにおいからは、時の流れが止まっているかのように想像され、一方で貸し出し記録には何年も前の人たちの名前が連ねてあるのを見ると、なんだか長い歴史の中に自分がいるような気がした。江戸川乱歩の少年探偵団シリーズや怪盗ルパンの単行本が置かれていて、表紙のおどろおどろしい絵はなんとも薄気味悪かった。昼休みは子どもたちでにぎわう図書室だが、授業中は誰もおらず静まりかえっていた。

ある日の社会科の時間、私は先生から、図書室に行って資料を持ってくるよう頼まれた。私は一人で図書室に行かなければならなかった。使命感をもって教室を出たが、だんだんと不安になってきた。図書室には誰もいないが、何かがあるような気がした。古い木造校舎の薄暗い図書室には、何かがあるもおおかしくない、と思える雰囲気があった。私は図書室の木戸を開けて中をうかがい、サッと資料を取って小走りに教室に戻った。追いかけてくるかもしれない。でも後ろは見たくない。もちろん何も追いかけては来ず、任務は無事終了した。思えば当時の私にとって、授業を抜け出して一人で校舎内を歩くのは非日常的体験であり、誰もいない図書室は非日常的空間であった。些細な出来事だが、私にとっては肝試しのような不思議な体験であったため、今でもよく覚えている。

その後私は、大学で臨床心理学を学び、不登校の児童生徒と実際に関わり合う機会を持つようになった。相談員やスクールカウンセラーとして中学校に行き、教室に入れずに

図書室で過ごす生徒と関わるのがたびたびあった。彼ら／彼女らは他の生徒よりも遅めに登校して図書室で勉強したり本を読んで過ごし、他の生徒に会わないようにして給食前に下校する。教室と家との間の中間領域が図書室（または保健室）なのであった。校内にあるけれど「学校」的ではない場所を彼ら／彼女らは居場所として選んで毎日登校していた。私はそこで一緒に本を読んだり話をしたり、（あまり大きな声では言えないが）キャッチボールをしたり、何もせずただボーッと過ごしたりしていた。やはり図書室には、教室とは違う時間の流れがあった。多くの生徒にとっての非日常的な時空間は、一部の生徒にとっては安全な場となっているのだった。

図書室はただ本があるだけの部屋、というわけではないのだと思う。そこで過ごす者にいろいろな影響を与える部屋である。誰もいないはずの図書室だが、やはりそこには何かがあるのかもしれない。図書室にある無数の蔵書にはそれぞれ筆者がおり、さらに多くの読者がいて、それぞれの人生の痕跡が残されてある。小学生の私は、薄暗い図書室に得体の知れないものの存在を感じたのだが、書物から漏れ出す様々な人々の存在感に圧倒されてしまったのかもしれない。しかし一方で、図書室に「別室登校」する生徒たちは、むしろ先人たちの存在感の中で守られ、その懐で成長しているようであった。図書室で過ごすこととはつまり図書を通して先人と対峙することであり、それを経て子どもたちは外の現実社会との対峙が可能になっていくのかもしれない。小学生の私はまだ未熟で、先人と対峙できるほど成長していなかったので図書室から逃げ出してしまったのだろう。

それとも、単なる恐がりだったのかな。

新任教員からひとこと：「私と図書館」

研究室貸出

特別支援教育講座

永井伸幸

学生時代、先生方の研究室を訪問するたびに膨大な蔵書に圧倒された。それがどういう内容の文献なのかは全く分からなかったが、やがて学年が上がるにつれ、出入りする研究室も絞られ、それにつれて研究室に滞在する時間が長くなった。その頃になると専門領域の知識も増え、研究室の蔵書を見ると「あの先生の本だ」、「あの分野の本だ」ということが理解でき、改めて大学教員というものは本を読まねばならないし、本代にかなりの経費をつぎ込まねばならないものなのだと思ったものだった。そのうち、図書館のシールが貼られた本が、常に本棚の同じ位置にあり、しかもシールが貼られているのは、洋書の十数冊のシリーズだったり、分厚いハンドブックだったり、いかにも高そうな本に多いことに気付いた。期限がきて一度図書館に持って行って更新するのも大変だし、第一そんな姿を見たことがないと不思議に思い、質問してみたところ、「教員特別貸出」という制度があるのだとの回答であった。本学では「研究室貸出」といわれている、研究費等の経費で購入した本が教員に対して貸し出され、実質その大学にいる間ずっと手元に置いておけるというシステムである。このシステムのありがたみを実感するようになったのは、卒業研究に取り組むようになった大学4年生から大学院生の頃である。序論をまとめるのに、実験方法、データの分析方法を調べるのに、考察の資料にと、必要な専門書が研究室に備わっているのが非常に便利であった。

一方で、このシステムに振り回された面もある。必要な資料をOPACで調べると、探していたものが検索に引っ掛かってくる。ラッキーとばかりに詳細情報を見ると、「教員特別貸出中」の文字が。所有者が自分の知っている教員ならお願いに伺うところだが、他組

織の教員では、所在地はよく知らないわ、顔も名前も全く知らないわでお手上げだった。直接交渉という手もあるかもしれないが、そこまでの度胸は私には無い。あきらめて別の資料を探したものだ。今となってみれば、図書館に相談に行ったら何かいい手があったのかもと思うのだが。

やがて私もそのようなシステムを利用できる身分となったが、これまでに「研究室貸出」を使ったことは無い。大きな理由は、流動性の高い身分だったので、必要な資料は自分で持っていけるようにしておきたかったことである。

そしてこの春から本学で教育と研究に携わることになった。まずはとにかく授業を、と私なりにがんばっているところであるが、さっそく図書館がらみで困ったことが生じてしまった。ある日、図書館の蔵書をざっと確認し、学生にテーマを渡して調べてくるよう指示し、「必要な資料は図書館にあるから」と伝えた。しかし、改めて調べてみると、当然あると思っていた資料がなかったり、古かったり、研究室貸出だったり、必要な資料が十分でないことが分かったのである。しかたなく、手持ちの資料を人数分用意し、学生に配付した。学生達は自分で見つけた資料と合わせていいレポートをしてくれたが、この状態を放置しておく、「そんなことは図書館で調べてきなさい」に対して「本が無いから無理」で返されておしまいである。ではどうするか。図書館の所蔵数を増やすしかない。そのためには図書館費で購入をお願いするとともに、私が資料を選んで自分の経費で購入し、研究室に置かずに図書館に置く必要がある。

ということで、「研究室貸出」実行は、まだまだ先のこととなりそうだ。

図書館利用 Q&A

～図書館をもっと活用するために～

Q1. 図書館利用証はいつまでも使えますか？

A1. 在学期間中は使えます。卒業すると「学外者」となりますので、最初の利用の際に住所など証明できる物を持参の上、改めて利用申請登録を行ってください。

Q2. 本を返そうと思ったら図書館の閉館日でした。どうしたらいいですか？

A2. 図書館入り口に「ブックポスト」がありますので、そちらに返却してください。

休館日は図書館ホームページの「図書館カレンダー」をご覧ください。



Q3. 借りた本の返却を忘れていました。罰則がつきますか？

A3. 返却期限を大幅に過ぎると罰則が付き、「貸出停止」となります。

次の方が予約で待っている資料もありますので、至急お返しくください。

Q4. 借りた図書の貸出期間を延長したい時は、どうしたらいいですか？

A4. 返却期限内であれば貸出期間を延長することができます。お手数ですが、自動貸出機（通称：ABC）かカウンターで手続きしてください。ただし、返却期限を過ぎた資料・次の方の予約が入っている資料・既に2回貸出期間を延長した資料は貸出期間の延長はできません。

Q5. 図書館で借りた資料を無くしてしまった（破損した場合も含む）のですが、どうしたらいいですか？

A5. カウンターにその旨をお申し出ください。

ご本人の過失による紛失・破損の場合は同一の資料を弁償していただきます。同一の資料が手に入らない場合はカウンターにご相談ください。



Q6. 読みたい図書は、どう探したらいいですか？

A6. 図書館内に5台の蔵書検索＝通称：OPAC（オーパック）用パソコンがあります。

使用方法は、カウンタースタッフにお聞きください。自宅からでもこのOPACにアクセスできます。図書館ホームページの「蔵書検索」→「学内蔵書検索（OPAC）」をクリックしてください。



Q7. 読みたい図書が、図書館に無い時はあきらめるしかないですか？

A7. カウンター前の「購入希望資料申込書」に記入し、所定のボックスに入れてください。担当者が選定し、購入します。また、他大学図書館に貸借を申し込むこともできます。カウンターにご相談ください。

Q8. パソコンの持ち込みはできますか？

A8. 可能です。



Q9. 持ち込んだパソコンでインターネット接続できますか？

A9. 図書館内には、無線LAN対応の場所が多くあります。（有線LANを使用する場所もあります。）

但し、利用するためのIDとパスワードが必要ですので、カウンターに申し出てください。

Q10. インターネットを使用できるパソコンはありますか？

A10. カウンター前に、11台あります。内9台は情報処理センターで取得したIDとパスワードが必要です。



Q11. CDやDVD、ビデオを見ることはできますか？ 自分のものを持って行ってもいいの？



A11. 図書館2階のAVブース（10台）で見ることができますので、カウンターでヘッドホンを借りてください。自分のCDやDVD、ビデオを持ち込んでもO.K.です。

Q12. レポートを書くため文献を探したいのですが、どこから探せばいいですか？

A12. 図書館ホームページの「情報検索」→学術情報リンク集の「論文記事を探す」・「新聞記事を探す」・「その他の情報を探す」などをクリックすると、論文や新聞記事を検索できるデータベースの一覧があります。各ツールの詳しい使用方法については、カウンターにお聞きください。図書館では皆様の調べもののお手伝いをしています。どうぞお気軽にカウンターにご相談ください。



Q13. コピー（複写）はできますか？



A13. コイン式のコピー機が3台あります。内、1台はカラーコピーもできます。白黒は1枚10円、カラーコピーは1枚50円となっています。両替はカウンターに申し出てください。

表紙の解説

クローンで増える植物 —ユキノシタ—

学務主幹付教務企画専門職
佐藤 秀二

表紙の花は「ユキノシタ」と言います。花期は6月～7月上旬で、湿った半日陰の岩場に生え、ご覧のように可愛い花を咲かせます。しかし、この植物には雄しべ、雌しべもあり、虫も来るのですが、なぜか種子を付けません。では、どのようにして子孫を残すのかというと、根元から花を咲かせる茎のほかに、ランナー（走出枝、匍匐枝）という赤い枝を四方に伸ばし、節が地面に着くと、そこから根が出て成長し増えていきます。言ってみれば自分のクローンを次々に作り、繁殖していくわけです。

ユキノシタは、和名で「雪の下」と書き、白い花弁を雪に見立てたとか、冬でも雪の下で葉が枯れずに残っていることから名付けられたと言われています。また、中国では「虎耳草」と言い、模様のある葉を虎の耳に見立てたとのことで、日・中双方とも、なかなか味のあるネーミングですね。

さて、このユキノシタですが、人間にとって有用な植物で、昔は皮膚のできものに、葉を焼いて柔らかくして貼ったり、葉の絞り汁を塗るなど、薬用植物として重宝されました。このため、寺社の石垣や民家の井戸のそばに植えられているのをよく見かけました。私は、このような特性から、人間がユキノシタの繁殖に一役買ったのではないかと考えています。（写真は葉とランナー）



編集委員 附属図書館運営委員会委員 藤田 博（英語教育講座） 笠間 賢二（学校教育講座）

編集後記

4人の先生から、これまで歩んでこられたエピソードを交えて、図書館をより有効に活用すべきとのご意見を、それぞれの角度からご執筆頂きました。学生の皆さんにその主旨が伝わり、授業の前と後に足繁く図書館に通って頂けたら嬉しい限りです。多目的閲覧室も、自由に勉強のできるスペースとなりました。暑い夏も冷房が効いていますのでご利用下さい。（Y.S.）

編集・発行：宮城教育大学附属図書館 〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149 平成19年7月10日発行
附属図書館オフィシャルサイトURL <http://www.lib.miyakyo-u.ac.jp/>